
今、届く、あの約束

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今、届く、あの約束

【Nコード】

N0733E

【作者名】

ともみつ

【あらすじ】

一人暮らしを始める前にやっていた片付け。思わぬものが思い出の中から出てきた。記憶の途切れた写真とネリネ。あれほど忘れることが出来なかったものを、どうして俺は忘れていたんだ？

「結構あるなあ」

季節は二月も後半。外はからっ風が縦横無尽にこの町を吹き荒らし、俺の部屋の窓ガラスを揺らせている。

「一人暮らし、か。俺にも出来るんだろうか？」

学校に行けば、まだ大学受験でピリピリした空気が漂っている。その中で俺は、推薦で合格した奴らと同じように、既に卒業モード。卒業すれば専門学校。そして同時に、地元を出て一人暮らしが始まる。今まで家事なんてやってこなかった俺は、最近になって母親に少しずつ教えを請いていた。そして、今は引越しに向けて新住居も決定し、少しずつ身辺整理をしろと言う親の言葉に、真新しいダンボールに、ここで過ごした十数年分の俺の荷物を、詰めていた。

「ま、何とかなるか」

学校は午前だけ授業があり、午後は二次試験対策のため、無関係者は自動車学校で免許取得や、卒業式の練習、帰宅自習など、もはや学園生活は終わっていた。何か思っていた学生生活の終わりと違っていて、随分と味気ないが、卒業式になれば少しは実感があるかもしれない。

「彼女くらい、作っておきたかったな」

部活までやっていたのに、彼女はいなかった。制服の第二ボタンを誰かに、なんて思っていたけど、どうせ後輩も興味はないだろう。思ってた悲しくなってきた。

「向こうで作れば良いか」

一人暮らしすれば、色々と便利なことも多いし。今はとにかく、片付けしとかないと。

「それにしても、多いな・・・」

何だかんだで、漫画とかCDが多い。それに写真も結構溜まったままで、整理してない。箱に入れたまま放置してたっけ。

「アルバムは持って行きたいしな。先に片付けるか」

クッキーが入っていた缶を、押入れの中から取り出す。派手な装飾の缶は、昔と同じ輝きをしてる。つい中にはお菓子が入っている感じがして、開けるのが少し楽しみを感じさせる。

「どんな写真が入ってたっけな？」

いつか整理しようとして、とりあえず適当に中に入れて仕舞っていた。ふたを開けると、その中に少しの隙間を残して、幼い頃からこの間までの過去の思い出が、その中には詰まっていた。

「おっ、合宿の時のか」

数枚の写真に写っているのは、合宿先の民宿で撮った部活とは無関係の写真。ただ楽しくておかしくて仕方がなくて笑ってる部員たちの顔と自分の顔に、記憶が全て甦ってきて、昨日のように感じる。「うわ、こりゃ他人に見せられないな」

人前じゃとても見せられないような醜態を晒す部員の姿も、今思えばこそで、その時は馬鹿をやるのが楽しかった。そんな写真が次々に出てくる。

今じゃどうしているのか分からない友達や、すっかり皺が増えたんだなあと思う、若い頃の両親と俺。そんな写真を見ると、片付けの手が止まる。過ぎる思い出の記憶が、本当に楽しかったんだなあとか、辛いことがあったんだあと言う俺のまだ僅かな人生の軌跡に、意味があったんだという実感が胸の中を温める。

「ん？ 何だこれ・・・」

写真を取り出して、選別していると、一通の可愛らしい猫のシールで封を閉じてある手紙があった。ピンクの封書には、そのシールがあるだけで、宛名も差し出し名も書かれてない。

「誰かに貰ったっけ？」

何となく、その見栄えは一度ももらった事はないから分からないが、ラブレターっぽい雰囲気を感じてる。

「貰ったなら覚えてるんだけどなあ・・・」

記憶が無い。覚えてないだけかもしれないが、とりあえずこの缶

に入っているのは、俺が適当に詰めた写真ばかりだから、俺宛じゃないかもしれないが、興味が湧く。シールをそつと剥がすと、すぐに剥がれる。最近のものじゃないのだと、シールの粘着力の弱さに思った。

「何だこれ……?」

封を開けて開くと、中には一枚の押し花のようになった色褪せた赤い花と、手紙と写真が入っていた。

「これって、俺だよ……?」

他の写真に比べて、サイズの小さな写真。少しだけ色褪せて、紅茶色に染まっている。そして、そこに写っているのは幼稚園くらいの俺と、一人の女の子。生まれてから髪を切ったことが無いんじゃないかと思うくらいに、腰の辺りまで髪が伸びていて、可愛いフリルの服に身を包んで笑っていた。

「誰だ……?」

それに比べて俺は、キャラクターもののシャツでまるで釣り合っていない格好だ。お嬢様と庶民が並んでいるようにも見えるが、どこか俺の中に、妙な感覚が生まれていた。

「これって、静ばあちゃんの家か?」

二人の後ろに見える庭の景色には、見覚えがある。ここ数年は行っていないが、親父の実家のばあちゃん家だ。そこに一緒に写っていることは、多分親戚縁戚関係のはず。ばあちゃんの家に戻りに、友達はいなかった。それに女の子の格好と、俺の格好。恐らく法事か何かで会った時の撮った写真だ。

「仲の良い子っていたっけな……?」

少なくとも、この子とは仲が良かったのかもしれない。だって、俺と女の子、小さな手を隣り合って恋人繋ぎで笑っていたから。

「手紙、か。覚えてないなあ」

封書に入っている手紙を取り出す。レターセットについているような、可愛いキャラクターの描かれている手紙。どうやらこの子から貰ったものらしい。けど、貰った記憶が甦ってこない。他の写真

は、一目見るだけで当時の情景が目の前に見えるのに、この一枚の写真からは、それが全く出てこなかった。

「汚い字だなあ」

思わず手紙を開いて笑みが零れた。その字は明らかに字を習い始めたばかりの子供の字。でも、俺よりも綺麗かもしれない。昔の俺の字は読み物じゃなかった。この手紙に書かれている字は、今でも読める。

「ともくん……ずっと、いつしよに……いよおね」
朋くん、ずっと一緒にいようねってことか。俺の名前は朋樹。だからきつとこれはやつぱり俺宛のものだ。

「いおり……いおり？」

行間なんて無視した大きな字。俺と一緒にいようね、という内容を書いたであろう、写真と一緒に写っている女の子の名前。

「いおり……いおり？」

って誰だ？ 何か心底で燻るものがざわめきを覚えさせてくるが、当時の記憶だけが甦ってこない。どうしてだろうか？ 俺は記憶力にはちよつとの自信がある。一番古い記憶は、まだ一才頃に、親父に抱かれて湯船の中で小便をしたことだ。親父が慌てていたのを覚えてる。それなのに、この写真の記憶だけが、途中で橋の板が抜け落ち、先に進めなくなり、行き詰ったような感覚だけが俺に疑念をもたらす。

「聞いてみるか」

俺は写真と花を手に、母親の元へ向かった。

「ねえ、ちよつと聞きたいんだけどさ」

この年になると、素直にお母さんと呼ぶことは恥ずかしくて言えない。自分の親なのに、ねえ、とかあのさ、とかでしか呼べない。

「この写真の子って知ってる？ 後、この花も」

「ん？ どれ？」

洗濯物を畳んでいた母親に見せる。

「これは、ネリネじゃない？」

母親が干乾びた花を見て、そう言った。

「ネリネ？」

そんな花あるんだ。そういえば、何か聞いたことがある気がする。
「ほら、静おばあちゃんの家の近くに良く咲いてたでしょ？」

「覚えてない」

子供の頃だから、花があっても興味で覚えていることは無かった。

「じゃあ、その子は？」

「っ！」

母親が小さく息を呑んだ。それは驚き。どうしてこんなものがあるの？ とでも言いたげな、母親の珍しい顔に、俺の中に燦っていた何かが大きくなった。

「あんた、覚えてないの………？」

それは問いかけだが、問いかけじゃなかった。俺が忘れていることを確認しようとする、恐れ恐れの問いかけに聞こえた。

「それだけ覚えてないんだよ。なんでか」

「………そう」

どこかホツとしたような、そう。ますます分からない。何でそこで安心したようにするのだろうか。

「この子、橘の叔母さん覚えてる？」

俺が覚えていないことに安堵した母親が、いきなり饒舌で聞いている。

「うん」

親父の妹で、俺の叔母。それは知ってるけど、この十年以上会ってない。

「叔母さんの娘よ。伊織ちゃんって言うの。歳はあんたより二つ上だったと思うけど」

「ふーん」

やっぱりあの手紙の差出人は写真に写っている伊織という子らしい。

「じゃあ、これって法事？」

「そうね。おじいちゃんの七回忌じゃなかったかしらね。それ以来は橘の叔母さんとは会ってないしね」

なぜか母親が俺を見て話さない。俺を避けてるような洗濯物に向く視線。それが明らかに俺の目には不自然だった。

「ねえ」

「うん？」

親父のシャツを畳む母親に、写真を見ながら問う。

「何で会わないの？」

率直に感じたことを聞いてみた。遠い親戚でもないのに、どうして長い間会うことが無いのか？ まあ、俺も親戚に会うなんて小学校以来今までないくらいに、関係は薄い。でも、親父の妹なら、こつも長い間会うことが無いのは不思議だった。

「・・・・・・時間が合わないだけよ」

一瞬、手が止まり、考えてからの発言だった。次第に大きくなる疑問。何かがあるのは間違いない。俺の直感が言ってくる。

「それより、さっさと片づけしなさい。そんな写真もういらないでしょ」

話を終わらせられ、俺は部屋に戻らされた。

「何かあったのか・・・・・・？」

親父たちと叔母さんたちの仲が悪いのだろうか。だから、会わないようにしている。そんな考えが過ぎった。だから、伊織という子も知らないし、忘れている。そう考えると合点はいった。

「でもなあ」

納得いかないものが俺の心を燦る。何故避けるのか。それには必ず理由がある。でも、俺にはそれはどうでも良かった。関係の悪い親戚なんて良くある話だし。俺が納得出来ないのは、こんなに楽しそうにしている俺と伊織の写真があるのに、その記憶が俺から抜け落ちていることが、どうしても納得出来ない。

「楽しいこと、じゃなかった・・・・・・？」

楽しい記憶は忘れていても、写真を見れば甦る。それが無いと言

うことは、この時に何かしら、そうじゃないことがあったから、忘れてる。多分間違いない。

「伊織と、ネリネ。それにずっと一緒……」

写真と花と手紙。大したことじゃないと言え、そうだけど、俺の心はそれを気にすることを止めようとしな。

「他に何か手がかりはあるか？」

部屋に戻り、写真の束から写真を探す。誰がこれを撮ったかは覚えていない。でも、この一枚だけが残っていると言うことはないはず。誰かがカメラを持っていたから、俺と伊織という女の子は、こうして切り取られた思い出の中に、いつまでも無邪気な笑みを浮かべ続けている。

「少なくとも、楽しかった」

大人たちはじいちゃんの写真と花とかを飾られた部屋でご飯を食べていた。でも、俺はつまらなくて、外に出た。ばあちゃんの家の周りには小川や畑、大きな桜の木があつて遊ぶにはもってこいだつた。「楽しかった……」

ふと、古い映画のような雑線に汚れた映像が脳裏に浮かんだ。

色褪せた映像が、映写機からスクリーンに映し出されるように、俺の眼前にあの頃の俺がいた。

「いや、恐かつたはず……」

笑っていたのは、最初だけだつた。そうだ。楽しかつたんじゃない。壊されたんだ。

「伊織。いおちゃん……」

パツとではないが、その名前が無意識に写真を探すうちに浮かんだ。

「この写真……」

同じ色褪せたサイズの小さい写真を全てが甦る俺の記憶に刻まれたほかの写真の中に埋没しているのを見つけた。

「やつぱりだ……」

写っているのは、大人たち。誰もが喪服。法事の時の写真だ。そ

ここに俺がいた。楽しそうに笑っていたさっきの写真とは違って、大人たちの後ろの端のほうで、俺は両手で目を隠して口を大きく開けている。それは泣いている。その証拠に母親が俺の頭に手を乗せている。

「いおちゃん、か」

ベッドに横たわりながら、写真を頭上に翳す。横になって見ているだけなのに、次第に大きく心底にあつた小さな灯が、熱を帯びてきた。

「痛かったんだよな……」

よく分らないうちに、親父に叩かれた。だから、あの写真の端っこで俺は泣いていた。思い出してきた。確かにあつた。この写真に込められた想いと、記憶が俺の中にも。

法事とかいうものに、俺は連れて行かれた。いつもと違って、ばあちゃんの家には、朝から知らない大人たちが沢山いた。みんな似たような服を着て、料理が沢山並んでいた。でも、子供の俺には退屈で、つまらないことばかりで我慢しきれなくなって、外に出た。家の中とは違って、外はいつ来ても楽しいことばかりだった。納屋とか言うところには、見たこともない変な道具が沢山あつて、農具とか言うみたいで、遊んじゃダメと言われてた。近くには田んぼがあつて、夏はそこにたくさんのおたまじゃくしがいて、それを捕まえるのが楽しかった。

『うわあ、金色だあ』

この時期は秋。収穫前の稲穂の海が風に波を生み出していた。いつ来てもばあちゃんの家の周りには、俺の目を輝かせるもので満ちていた。

そして、一番好きだったのは、田んぼの近くにある大きな木。桜の木で、春はその下でお弁当を食べるのが楽しかった。でも、秋は裸木になってる。それでも、大きな木はこの桜しか見たことが無かったから、好きだった。

『だあれ？』

桜の木に行くと、女の子が木を見上げてた。少し冷たい風が女の子の長い髪をぶわっと動かしていて、人形が来ているような派手な服を着ていた。

『え？』

声をかけると、女の子が気がついてこっちを見る。可愛い女の子だった。

『だれ？』

女の子が俺に聞いてきた。

『ぼく？ ぼくはともき。きみはだれ？』

『あたし？ あたしはいおり。たちばないおり』

橘。その名前は知ってる。叔母さんが同じ名前だ。だから、この子が娘なんだと分かった。こんな田舎町でお洒落な格好をしている子はいなかったから。伊織ちゃんが従兄妹だと知ったのは、それから随分と年月が経ってからだったけど。

『なにしてるの？』

『みてるの。おっきな木だよ』

伊織ちゃんがまた桜の木を見上げた。

『さくらっていうんだよ。はるにたくさんはなをさかせるんだ』

伊織ちゃんは知らないみたいだから、俺は得意げになって、桜の木のことを話した。

『そうなんだ。あたしもみたいな』

伊織ちゃんが俺に近付いてきて、ニコツと笑った。

『ねえ、ともくん』

『ともくん？』

初めて呼ばれたあだ名だった。いつもは朋樹君とかでしか呼ばれなかったから、一瞬自分のことだと気付かなかった。

『うん。ときだから、ともくん』

幼い俺を指差して、そう言う。俺はともくん。その頃の俺は、そう呼ばれることが初めてだったから、なんだか嬉しかった。

『じゃあ、いおちゃん』

『うん。いいよ』

いおちゃん。可愛い女の子。俺よりも少しだけ背が高かった女の子。この時は、伊織ちゃんが年上だなんて思っても無かったし、そんなもの関係なかった。

『ねえ、ともくん』

『なに？』

『いつしよにあそぼ。おばあちゃんの家にもつまらないの』

『いおちゃんも？ ぼくもだよ』

『そうなの？ じゃああそぼ』

『うん』

それが伊織ちゃんとの始まりだった。

『ねえ、いいの？』

伊織ちゃんは俺よりも色々を知っていた。

『田んぼに入っちゃ、お米がだめになるよ？』

だから、当時の俺は稲穂が実りだと言うことを理解していなかった。伊織ちゃんはそのへ入ろうと誘う俺に、ちよっと待ったをかける。

『へいきだよ。ぼくいつもあそんでるもん』

でも大人の体じゃない、小さな体だから、稲穂の中に入っても実りで垂れる黄金の稲を倒すことが無かったから、大人にも叱られることはなかった。

『ほらっ、いおちゃん』

『わっ』

先に田んぼに入った俺の胸の辺りまで稲が包み込む。少し力サカサしているけど、柔らかい感触が気持ち良かった。だから、いおちゃんにもそれを感じて欲しくて、俺はあぜ道で立ち竦んでいるいおちゃんの手を掴んで、引っ張り込んだ。

『おいかけっこしよ。ぼくがにげるから、いおちゃんはおにね』

『あたしがおに？』

本来なら、男が追いかける側だろうに、当時の俺は伊織ちゃんを鬼した。ただ楽しければそれで良かったから、ませた真似なんて思いつくはずもなく、俺はそう言っと、田んぼの中を駆け出した。

『あつ、まつてよ。ともくんっ』

稲穂の海に浮かぶ、二つの小さな体。逃げる俺を、動きにくそうな服の伊織ちゃんがおいかけてくる。

『おーにさん、こつちだ』

『ともくんはやいよお、まつて。きやあつ』

『へ？』

いきなり後から伊織ちゃんの悲鳴が聞こえて、振り返ると、そこにいたはずの伊織ちゃんがいなくなっていた。

『いおちゃん？』

サラサラと稲穂が波打つ。見渡す限り、そこには黄金の稲穂だけで、その中で俺しかいなかった。

『いおちゃんどこお？』

急に一人になって、不安が俺を煽る。俺は稲を掻き分けながら来た道を戻る。

『わっ！』

『うわっ！？』

ガサツと俺の目の前に、ばあつと、いおちゃんがジャンプして稲の中から飛び出てきた。いきなりだったから、俺はびっくりして稲を巻き込んで尻餅をついた。

『えへへっ、ともくん、つかまえたっ』

いおちゃんがこけた俺に、タッチした。

『いおちゃんずるいんだあ』

こけたいおちゃんが、探しに来た俺をそのまま捕まえた。俺はそれが悔しくて、頬を膨らませた。

『さくせんだもん。引つかかったともくんがわるいのよ』

いおちゃんが笑いながら俺を見下ろす。その表情が今思い返せば、可愛い女の子の魅せた綺麗な女性の顔だった。それでも当時の俺は、

悔しくてすぐに立ち上がった。

『こんどはともくんのおにだよ』

『いおちゃん、まてえ』

『こつちだよー、つかまえられるかなー？』

俺が立ち上がると同時に、いおちゃんは稲穂の海へかけだした。

ほんのりとシャンプーの匂いが俺の鼻腔をくすぐるが、俺はその香りの続く方向へ駆け出した。

『まてー』

実りの秋で、収穫間近の稲穂田。日常世界とはまるで別世界の、俺といおちゃんしかいない、金色の大海。可愛い女の子の楽しそうな笑い声と、それを追う待てえという俺の声。風に靡く稲穂が擦れあい、乾いた音が俺といおちゃんを通り抜ける。そんな楽しい時間が、あの時は本当に楽しかった。

『うわ、ともくん、いつぱいついてるよ』

鬼ごっこを止めて田んぼを出ると、俺の服には稲穂の屑などがある。ちこちに付着していた。それを見たいおちゃんが、俺の服についた屑を小さな手で払ってくれる。

『いおちゃんもたくさんついてるよ。ぼくがとってあげる』

それと同じように、いおちゃんの可愛い服にも沢山付いていた。だから俺も同じようにいおちゃんの服についた屑を払う。二人してお互いの体を払いあう。それもまた遊びになる。子供なんて道具がないなら、何でも、どんなことでも遊びを自ら考え付くもの。

『つかれたね』

『うん。いつぱいあそんだもんね』

沢山走り回ったから、俺は疲れた。鬼ごっこ後は、トンボを追いかけて、近くを流れる小川で石を投げて遊んだ。それは明らかに男の子の遊びだったけど、いおちゃんは嫌な顔一つせず、一緒になつて笑ってくれた。

『ねえ、ともくん』

二人して、ばあちゃんの家への入り口にあつた。ちよつとした段差で

座って休んでいると、いおちゃんが立ち上がって俺を見る。傾き始めた日の光が、いおちゃんの後から降り注いでいた。素直にその姿が輝いていて、綺麗に見えた。

『もっかいあそこにいこ?』

いおちゃんが稲穂の中に立つ桜を指差す。

『またあ?』

どうしてまた行きたいのか、その頃の俺には分からなかった。

『うん。たのしいことしょ?』

『たのしいことお?』

まだそんなことがあるのか、と俺は首を傾げた。

『うん。それとたくさんおしえてくれたおれい』

『おれい?』

俺の問いに、いおちゃんはただ笑って頷いた。もっと遊びたかったから、俺は立ち上がって頷いた。

『あれ、いーちゃんに朋樹君?』

『あ、おねえちゃん』

桜の木に行こうとした俺たちの背後から、大人たちが数人出てきた。そろそろ帰る人たちのようで、ばあちゃんの家の外に賑わいが訪れ始めた。

『どうしたの、おねえちゃん?』

いおちゃんがいおちゃんの姉を見る。お姉さんの手には、どこにでも売っている使い捨てカメラがあった。

『あつ、そうだ。いーちゃん、朋樹君。写真撮ってあげる』

すると、お姉さんが俺といおちゃんを隣同士に並ばせて、カメラを構えた。

『ほら、二人とも笑って』

いきなりのことです惑う俺をジッと見ていたいおちゃんが、不意に俺の手に触れてきた。

『ともくんっ、ほらわらって』

『えっと……』

いきなり繋がれた手に、俺はちよつと照れていたのかもしれない。その小さな手から伝わる、今日一日を一緒に遊んだ女の子の温もりがすぐ傍にあつて、初めてドキツと言う想いを感じたのかもしれない。

『もー、そうじゃないよ。ほら、こうだよっ』

俺が相変わらず戸惑っているのを見て、いおちゃんが握っていた手を離すと、俺の顔を引張る。

『い、いひゃいよお、いおひゃん』

『こらこら、いーちゃん。つままないの』

それを見たいいおちゃんのお姉さんが苦笑する。

『だって、ともくんわらつてくれないんだもん』

いおちゃんが不満そうに俺を見る。

『うーん、そうねえ。それじゃあ、朋樹君』

『なあに?』

お姉さんが俺の前に視線を合わせるように屈んでくる。

『今日は楽しかった?』

『うん』

楽しかった。俺の答えに、いおちゃんが安心したように笑む。

『その楽しかったことを思い浮かべてみて』

『うん』

頷いて、楽しかったことを思い出す。いおちゃんと鬼ごっこをして、トンボを追いかけて、小川で遊んで、俺の知らない花のことをいおちゃんが教えてくれて、いおちゃんと一緒にお互いのことを話しながらあぜ道を歩いた。それは楽しかった。だから、あつという間だった。

『楽しいことがあると、思い出すだけで楽しくなってくるでしょ?』

お姉さんの言葉に、俺は首を縦に振った。

『えへへっ、たのしかったよね?』

いおちゃんが俺を見て笑う。

『うんっ、楽しかった』

その笑顔につられて、俺の顔が同じように破顔する。

『うん、そのままね』

俺たちを見たお姉さんがニツコリと笑うと、少し離れた。

『ともくん、て、つなご?』

『うん、いいよ』

いおちゃんに俺は手を差し出すと、いつもは掌同士を合わせるだけの手を繋ぐと言う行為でも、この時は違った。

『いおちゃん?』

さっきよりもいおちゃんが近くににいる気がした。

『こいびとつなぎっていうんだって。あたしたち、いっぱいあそんだからこいびとだもんね?』

『うんっ』

合わされた掌と、互いの指間に互いの指を滑り込ませる繋ぎ方。

いおちゃんがぎゅっと握るから、俺も同じように握り返すと、いおちゃんが笑ってくれた。そしたら、俺も楽しくなった。これが恋人って言うものなのか、と俺はまた一ついおちゃんに教わった。

『はい、じゃあ撮るよー』

いおちゃんと見つめ合う。そしたら、今日のことが甦ってきて、二人して同時に笑みが漏れて、そのままお姉さんが呼ぶ声に、カメラを見ると、ピカッと眩しい白い光が俺といおちゃんを包み込んだ。写真を撮ると、お姉さんはもうすぐ帰るよ、といおちゃんに言った。

『もうちょつとだけ。ともくん、いこっ』

でもいおちゃんは、それを聞き流すと、繋いだ手をそのままに、僕を引張って駆け出す。僕よりも足が速くて、僕はいおちゃんの少し後を追いかけて、ばあちゃんの家から駆け出し、桜の木にいおちゃんと何が楽しいのかも分からないのに、楽しくなつて笑いながら一緒に走った。

『沙織ちゃん、ウチの朋樹見なかったかい?』

『あ、伯父さん。朋樹君ならいーちゃんとあそこです』

二人が駆けた後を、もうすぐ帰ろうとする大人の中から、一人離れた朋樹の父が、伊織の姉の沙織に話しかけた。

『全く。そろそろ帰るってのに……』

やれやれ、と朋樹の父が沙織に礼を言いつと、二人が向かって行った桜に向かって迎えに歩き始めた。

『いおちゃん、なにをするのお？』

桜の木に来ると、俺といおちゃんは、小さな呼吸を数回繰り返して、落ち着きを取り戻す。

『んーと、さっきこの辺にあっただけだなあ……』

だが、いおちゃんは俺の問いかけを無視して、繋いだ手を解くと、桜の木の周りをきよきよと何かを探し出す。

『いおちゃん、どうしたの？』

『ひ・み・つ、だよっ』

尋ねる俺に、いおちゃんはニツコリと笑ってまた足元を探す。俺はそんないおちゃんをただ、不思議そうに見るしかなかった。いおちゃんの髪は長いから、下を向いていると、後ろに垂れていた髪がサラツと頬をくすぐっていた。それを書き上げて耳にかけるその仕草に、当時の俺はやっぱり今と同じで可愛いな、と思っていた。今はきつと綺麗だなとも思いかもしれない。初めて知った女の子の仕草の魅力だったかもしれない。いや、これは初めてじゃない。きつと一緒に遊んでいた楽しさが、既に魅力だったはずだ。

『あ、あつたっ』

いおちゃんが桜の木から少し離れたところで、何かを見つけた。

『なあに？ これ』

いおちゃんが見つけたのは真っ赤な花。それを二輪摘むと、一輪を俺に差し出してきた。

『ねりね』

いおちゃんが楽しそうに笑う。俺にはどうしてだか分からずに、首を傾げていた。

『ねりね……？』

『うん。あたしともくんのお花だよっ』

渡されたネリネの花。彼岸花にも似ていて、幻想的な花序を作り、一つ一つの花は先端がちぢれ、波打っているような六弁花。

『ぼくといおちゃんの？』

当時も今も、どうしてネリネが俺といおちゃんの花なのか分からない。

『うん、だからずっともっててね』

『うん、わかったよ』

貰った花と一緒に見つめて、笑む。どうしても、それだけでも楽しかった。

『ねえともくん』

『うん？』

『あたしね、もうかえるの』

『うん、ぼくもだよ』

さっきの大人たちを見ていたら、もう法事は終わり、俺も何となくそろそろ帰るものと分かっていた。

『あたしね、もっとあそびたかった。ともくとあそぶのたのしいから』

『うん、ぼくも』

そうだ。この時は、少し寂しかった。やっと仲良くなれたと思ったら、もう帰らないといけない時間になった。子供の都合なんて、大人にはなかなか通用してくれない。大人はずるい。そんなことも思っていたかもしれないが、実際はどうだったかなんて、当の昔の出来事。そこまでは覚えていない。

『だからね、思い出をつくらう？』

『おもいで？』

思い出とは何なのか、当時の俺は分からなかったはず。目先のことばかりが世界の全てだった。幼い子供なんて、特に男の子はそんなもんだ。だから、そんな記憶があったことすら忘れてしまう。

『うん。ネリネだよ』

その言葉は分からなかった。

『どうするの?』

遊ぶ以外に、何をしようと言うのか。俺の頭にはそれしかなかったはず。今思えばもつと色々あっただろうに。悔いの念を感じそう
だ。

『ともくん、め、つぶって』

『なんで?』

目を閉じたら、何も見えなくなっちゃうよ。そう俺がいおちゃんに言っている。そんな俺に、いおちゃんは笑うだけだった。

『ないしょだよ』

男なんていつの時も、女には敵わない。どんなに幼くても、心の成長の早さは男が群を抜いて遅い。子供ならまだしも、大人に成ってから子供の心を持つ多い。それが魅了にもなるのかもしれないが、家族にいるとなると始末が悪いだけだ。

『ほら、ともくん、め、つぶって』

『うん』

言われるがままに俺は目を閉じた。

ゆらゆらと揺れる秋の稲穂。初に包まれた黄金の米がたわわに実り、質感を感じさせる揺れ方をしている。それに周囲を囲まれた、裸桜が俺といおちゃんを見下ろすように鎮座している。田舎の初秋の光景。

『ずっと、わすれないから……』

飛び交うトンボの群れの中に静かに佇む小さな体。ゆらりと秋風に舞う幼き少女の艶のある髪が、後に舞う。

『ずっと、いつしよにいたら……』

『いるよ』

『えっ?』

いおちゃんの驚きの声が、小さな口から漏れる。

『ぼくは、いるよ。ずっとずっと』

『ともくん……』

どうしてそんなことを分からないまま言ったのか、分からない。少しばかり格好をつけようとしたのかもしれない。不安そうな声が、折角過ごした楽しい時間には相応しくないと思ったのかもしれないが、分からない。

「うん、ありがとう……」

伸ばされた二つの小さな手が、幼い俺の頬を包み込む。冷涼な風の中に感じた、小さな温もり。生まれて始めて感じる、家族以外の異性の温もり。

「んっ……」

分からなかった。自分の唇に感じたものを。

「お前たちっ！ 何してるんだっ！」

その時だった。びくっといおちゃんの体が震えて、温もりが解けた。その声が聞こえたほうを振り返ると、初めて見る、親父の怒っている顔があった。ほんの少しだけの、幼い子供でいられた甘く温かな時間が、終わりを迎えた。

俺がその時、最後に覚えているのは……

「そうだったんだな……」

頭上に翳す写真の記憶が、全て甦った。

「あれが、初めて、だったんだな」

今だからこそ、苦笑が漏れる。その苦笑が向くのは、もちろん当時の俺に対してだ。

「泣かせちゃったもんな」

俺も泣いた。親父に初めて叩かれた。痛くて泣いた。でも、それ以上にいおちゃんが泣いている顔が、一番強く甦って、閉じた瞼の裏に焼きつく。

「情けないなあ、俺」

今思い出しても、痛い。それは親父に本気で叩かれたことじゃない。幼いから言えば、それまでかもしれない。それでも、一人の女の子を、初めて会ったのに、あんなに仲良くなれた女の子を、最

後まで笑顔でいてあげられなかったことに対しての痛みがある。
「いおちゃん……」

俺と一緒に写る写真。本当に楽しそうな笑み。俺も笑っているが、どこか緊張を隠しきれていない笑み。恐らく、照れだ。言うだけ言っ
て、何も知らない、何も出来なかった俺にもあった、ませた男心。
「下らねえな、ったく……」

今更なことだろう。それでも、この少女の思いを俺は忘れていた。
大馬鹿野郎だよ、俺は。

次々に浮かんでくる後悔。女心は繊細だ。だからと言って、男心
が大雑把ではない。むしろ男の方が、こういうことに限らず、もっ
と女々しさを残す。男だって結構繊細、いや、だいぶ繊細だ。

「ずっと、一緒だよ」

手紙に書かれたその文字を、何度も目でなぞる。いおちゃんが、
どんな気持ちでこの手紙を書いたのか、幼い筆体からは、俺には理
解してあげるには、黒く染まりすぎたのかもしれない。だから、書
かれた言葉と、甦った、キラキラと輝き続けていたあの日の約束の
温もりから感じ取る。

「今は、どうしてるんだろうな……」

もう遅いことくらいは、俺でも分かる。もしかしたら、いや、も
しかしなくてもいおちゃんは、伊織になって、こんな思い出があっ
たくらいにしか思っ
てないだろう。あの日から、それぞれ別の道を
歩かされてるんだ。交わることはないだろう。

「でも、いつもらったんだっけ……」

俺の記憶では、あの日、親父に叩かれて泣きながら家に帰って、
ばあちゃん家を出る時は、いおちゃんとはもう近付くことすら許さ
れなかった。なのに、この手紙と、ネリネの花と、写真が、今俺の
手の中にある。不思議だった。

「少なくとも、あの日よりも後だもんな」

俺が直接貰った覚えはない。この写真を撮ったのは、いおちゃん
のお姉さん。あれは使い捨てカメラだったから、現像は後日。だか

ら、この手紙も全部、後に貰ったものか。俺の知らない過去が、ここにあるのは確か。

「・・・・・・・・聞けないもんなあ」

この手紙、いつ貰ったやつ？　なんて母親に聞けば、さつきみたいに微妙な表情をされるし、父親はもつての外だ。法律上は問題なくとも、モラルとしての問題が根強い。だから、口に出来ない想い、子供の頃だから、そんなことは知らないけど、もうそれくらいの分別が付くくらい成長した。

「しょうがないんだよな・・・・・・・・」

ため息と同時に、苦笑が出た。

「ネリネって結局、何だったんだろうな？」

いおちゃんかやけにネリネにこだわっていた。手紙にも同封したくらいだ。ただ好きだからくれたわけじゃないだろう。

「はな・・・・・・・・花・・・・・・・・花言葉？」

花を連想する中で、意味がありそうなことで思い当たるのは、花言葉だった。

「知らないしなあ・・・・・・・・」

生憎、花には興味がない。花言葉なんてバラくらいしか知らない。つて、あんた、まだ片付けてないの？」

「うわあっ！？」

がちゃ、とノックも無しに母親がドアを開けた。俺はとっさに写真と手紙を枕の下に押し込んだ。

「ノ、ノックくらいしてくれよ」

「何よ。まともに荷造りも出来ない息子のくせに」

ほっとけ。こっちは大事なことを思ってたんだよ。そんなことを内心でばやきながら、膝に落ちたネリネの枯れた花を手に取る。

「ねえ、花言葉って分かる？」

「花言葉？　何の花？」

母親が、俺が散乱させたままの写真を拾い、缶に仕舞っていく。
「ネリネ」

ばあちゃんの家や周りに沢山咲いていた花。いおちゃんが俺にくれた花。

「ネリネ？ 確か、また会う日まで、じゃなかったかしら？」

「また会う日まで……」

ドクン、と俺の中で何かが動いた。長い間巻かれることなく、時を止めていた時計が、ねじを巻かれ始めたような感覚だ。

「それがどうかしたわけ？」

「え？ あ、いや、別に」

母親が怪訝そうに俺を見る。俺はどうしてか、急に体が熱くなつて、脂汗のようなものが出てきた。緊張してる。

「それよりもさ、さっきの写真なんだけど」

「……」

母親が息を呑んだ。それでも俺は続ける。へんなことを聞くつもりはない。

「あれって、いつ貰った？」

「……聞いてどうするの？」

警戒されてるなあ。別にそんなつもりはそんなにはないんだけど。ただの興味。それ以外はないって

しばらく俺を見た後、母親が小さく息を吐いて緊張を解いた。

「そうねえ、確か五年前くらいだったかしら。橘家の所の沙織ちゃんを持つてきたのよ」

「五年？ 最近じゃん」

てつきり、あの後からそんなに日付が経っていない頃だと思つた。

「色々あったのよ」

「ふーん」

それつきり母親は口を閉ざして立ち上がる。俺も興味、とだけ言つたから、それ以上訊くに訊けなかった。

「あんまり時間もないんだから、いる物は早くまとめておきなさいよ」

「分かってるよ」

ガキじゃないんだっての。何度も言わなくても分かってる。そんなことを思いながら母親が出て行くのを見送り、ドアが閉まると同時に、肩の力を抜く。

「五年前だったんだ……」

最近も最近だ。なんでそんな時期に、この写真と、自意識過剰かもしれないが、この手紙、ラブレターだろう。それにネリネが、また会う日まで、と言う花言葉だなんて、もう意味は一つしかないじゃないか。

「橘、伊織……」

俺よりも二つ年上ってことは、今年二十歳か。もうあの頃のような風貌ではないだろう。

それを分かっているのに、俺の心は、妙な熱を感じさせている。

「また会う日って、いつだろうな……」

何となくだけど、どうして今まで忘れていたのか、ふと頭に浮かんだ。きっと、親父が俺たちのキスを見て、俺をぶったこと、そして、いおちゃんを泣かせたことは、同時の俺の中では、何よりも悲しい記憶として刻まれたのだろう。

壊れそうで、大切すぎて、触れることを恐れていた一人の少女との思い出。それが何気ないきっかけで開かれてしまった、幾千の夢と想いを閉じ込めていた缶を開いたことで、悠久に止まるはずだった時間が、誤りなのか、そうなるようにひっそりと時を待っていたのか、動き出してしまった。

「どうしたら良いんだろう……」

次第に鼓動が膨らむ。抑えきれない想いが、鼓動を刻む度に、あの日の少女を強く彷彿させる。

「ずっと一緒だよ……」

「また会う日まで……」

俺って、案外純情なんだな。昔のことなのに、昔は感じられなかった想いを、今はしっかりと感じて、あの日に戻れたら、あの日の

俺にどうさせていたかとか、今のいおちゃんがどんな女性になっているかだとか、そんなことばかりが荷造りをする手を動かそうとしなかった。

「どこにいるのかな、いおちゃん……」

引き離された想いだからか、これまでに感じたことがないくらいに、俺の中に、あの日の約束が無限に反芻していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0733e/>

今、届く、あの約束

2010年10月8日15時30分発行